図書ニュース

第３号
2007.７.6 発行
大阪府立北野高等学校図書館

以下は新着図書の紹介（文学書を中心にその他も含む）
なお、[　　] 内は本校図書館の分類番号です。

文学書

１．「ロング・グッドバイ」　レイモンド・チャンドラー　[933-C25-1]
村上春樹訳
２０世紀の最も有名なハードボイルド作家の一人。処女長編『大いなる眠り』で初登場した探偵フィリップ・マーロウは、チャンドラーが生み出した、そして全ハードボイルド小説の中でも最も有名な探偵と言われる。この作品の「ロング・グッドバイ」の訳者は村上春樹。春樹ファンにとってもお勧めの１冊である。

２．「父フロイトとその時代」　マルティン・フロイト　[140-F3-1]
神経病理学者を経て精神科医となり、無意識研究、精神分析の創始を行った、かの有名なジグムント・フロイトを父にもつマルティンが書いている本。精神医学のみならず、今なお人間理解に大きな影響を与えているフロイトとその周辺のことを知るにはよい本である。

３．白夜行　東野圭吾　[913-H50-5]
東野圭吾はエンジニア出身の作家で、２００６年に６度目の推薦でようやく直木賞を受賞したことは記憶に新しい。 白夜行は彼の推理小説の一つ。いろいろな人がレビューを書き、ドラマにもなった、東野圭吾の魅力が溢れるおもしろい本である。

４．幻夜　東野圭吾　[913-H50-6]
白夜行の続編。阪神淡路大震災という大きな災害がストーリーの核。関西出身の作者らしく、関西が舞台になるシーンがたびたび出てくる。

５．使命と魂のリミット　東野圭吾　[913-H50-7]
病院が舞台のミステリー（？）
自分の使命は何だろうと考えるきっかけになるかもしれない。

６．ピアニシモ・ピアニシモ　辻仁成　[913-T86-4]
辻仁成は1989年、「ピアニシモ」ですばる文学賞を受賞し作家デビュー。彼は、元ロックバンドのボーカリストという異色の経歴を持っている。「ピアニシモ・ピアニシモ」は、処女作「ピアニシモ」とは全く違う作品。筋もテーマも全く別で、続編ではないゆえ、この作品のみ読むことも可能。孤独な少年がついに勇気と希望を勝ち取るまでの感動的な長編小説である。

７．星新一　　最相葉月　　[910-S70-1]
1001話をつくった人
星新一は、非常に短くて簡潔な文章を書き、その作品はショートショートと呼ばれる。しかし、その短い何気ない文章の中にも、非常にするどい社会批評が貫かれていて、読むのを止められなくなる。
多作で、しかも質の高さを保った星新一のことを書いた本である。

８．前巷説百物語　　京極夏彦　　[913-K87-2]
京極夏彦は作家であるがまた、妖怪研究家としても知られている。
『巷説百物語』は、テレビドラマ版やテレビアニメ版が作られているが、アニメ版では声優として彼自身が「京極亭」を演じた。 前巷説百物語は、シリーズの中では、主人公の又市がまだ若くて表渡世にいたときの、いわば「エピソード1」とも言えるような作品。

９．決戦川中島　　松本清張　　[913-M23-22]
代表作「点と線」で社会派推理小説の元祖と言われる。彼はまた、歴史研究家（邪馬台国論争等）としても知られている。
本書は現在NHKの大河ドラマで放送している山本勘助が仕えた戦国時代の武将武田信玄の生涯を１冊の本にまとめたもの。名将、必ずしも天下人にあらずというところが読み取れて興味深い。文体はとてもシンプルで読みやすく、人物の相互関係もわかりやすい。

食に関する本

１０．おいしいハンバーガーのこわい話　　エリック・シュローサ　[498-S18-1]
アメリカの事例を踏まえてファストフードの実態を書いた本。
ファストフードの歴史からそのビジネスモデル、作られ方、人体への影響などが分かり興味深い。ファーストフードからスローフードへさらに日本の伝統食を見直すきっかけになる一冊。食に関する事実を知るためにもぜひ読んで欲しい本である。

歴史の本

１１．興亡の世界史１４　　土肥恒之　　[209-K4-1-14]
ロシア・ロマノフ王朝の大地
世界一とも言われる莫大な富を築いたロマノフ王朝を軸に、ロシアという巨大な民族・国家の興亡を描いた通史。

１２．興亡の世界史１６　　井野瀬久美恵　　[209-K4-1-16]
大英帝国という経験
金融の中心地シティーがウォール街にその座を奪われるまで、七つの海を支配した大英帝国。いろいろなエピソードを交え、多面的に大英帝国時代のことを記述した本。

英語の本

１３．シンプルな英語で日本を紹介する　　曽根田憲三　　[837-S3-1]
（出版社 / 著者からの内容紹介）
日本の文化、地理、社会、歴史から衣食住まで、日本人として知っておきたいことを、すぐに使えて覚えやすいように、短くシンプルな英語で紹介。

１４．海外からのゲストを日本に迎える　　石津奈々　　[837-I4-1]
英語表現集
（出版社からの内容紹介）
外国からのお客さまを迎える時に必要な、あらゆるフレーズを1冊にまとめた本。　空港から自宅に迎える・どこかを案内する・日本の生活やさまざまなものを説明　する・・・など、あらゆるフレーズを収録。

文庫本

１５．岩波文庫
倫理学（三）　　和辻哲郎　　[081-I1-9-144-11]
（四）　　[081-I1-9-144-12]
「人と人との間柄」の倫理学として知られる「和辻倫理学」は、多くのひとに読まれた戦前から戦後にかけての代表的な倫理学である。

１６．岩波文庫
国語学原論（上）　　時枝誠記　　[081-I1-9N-110-1]
（下）　　[081-I1-9N-110-2]
名著の文庫化。国語学主流の橋本進吉などとは一線を画した、「言語過程説」などの独特の国語学理論を味わうことができる。

さて、世に新しい文体を知らしめたエポック・メーキングな本がある。第一次大戦後に現れたLost Generation「失われた世代」時代の米国ノーベル賞作家ヘミングウェー。彼によって生み出されたハードボイルドで書かれた作品群がそうだ。今回はそのハードボイルドの文体で有名なレイモンド・チャンドラー のロング・グッドバイを紹介した。村上春樹の翻訳で読んだ後、いつの日かまた、さらに英語の原文に挑戦してみて欲しい。言葉というものは生きているので、常に新陳代謝が行われている。古典に親しむと同時に、新しく出版された本にも目を向けよう。新たな発見があるかもしれない。それもまた読書をする醍醐味と言えるだろう。テーマやジャンルを決め本を選んで読むのか、本を選ばず、手当たり次第に読むのかは自由だ。何れにせよ、本の世界に触れると、自身の世界が何らかの影響を受ける。そこで得た知識が自分のものになって知恵に昇華することもあるだろう。夏休み前の一時を読書をして過ごすのは大変有意義なことである。　なお、図書館の地下には優れた本が沢山ある。江戸時代の小藩である松浦藩の殿様、松浦静山が隠居後に著した「甲子夜話」は江戸時代の人々の暮らしぶりがよくわかる名本である。当時でも長生きをした人はたくさんいて、１００歳クラブみたいなものがあった。そこでは闊達な意見が交わされ、大いに論議の花が咲いたのである。また、上田秋成は辰巳の会という出席者全員が物語をする会に出ていて、そこでの話を「雨月物語」にまとめたのである。江戸の文化とはこういう形で生まれ受け継がれていったのである。何はともあれ、先ずは図書館に来て本を手にして欲しい。

最後に、本を２冊紹介する。

脳ひとり歩き時代　　勇崎賀雄著　　河出書房新社 ブームを斬る！

最近「脳トレ」という言葉がよく聞かれる。この本の著者である勇崎は「バカの壁」のベストセラーで有名な解剖学者養老孟司の「唯脳論」や立花隆の「脳を鍛える」また、脳科学者茂木健一郎の脳理論を偏ったいびつな発想であると厳しく批判している。偏差値を重視した今の教育は偏知教育へと繋がり、結果極めていびつな経済的観点のみ追求する起業家というか虚業家を生み出すことになる。新聞紙上を賑わしている事件の発端が偏知教育にあると言えなくもない。日本においては古来より伝統的なやり方で「知」を育成してきたが、今の教育には全くと言っていいほど受け継がれていない。道徳教育を教科課程に入れるというような短絡思考ばかりがまかり通っている現状では、全体のバランスのとれた「知」が必要であることを痛感する。著者は、ついこの前まで、日本人であれば誰でも持っていた「身体知」をこそもっと養うべきであるとさまざまな観点から鋭く指摘している。「計算ドリルで頭がよくならない」「武道の身体性は、高くない」など目から鱗の内容である。「呼吸はバランスが重要」として、巻末には具体的な呼吸法のやり方も書かれている。

「ぼくは13歳 職業、兵士。―あなたが戦争のある村で生まれたら 」 鬼丸昌也・小川真吾著　　合同出版

ロシア、チャイナは言うまでもなく、アメリカ・イギリス・フランスの三国はODA政府開発援助より、武器貿易で得る金額の方が多く、発展途上国に金銭援助をするというより、お金を吸上げているという現実がある。 この５カ国がどういう国々であるかは言うまでもない。国連として果たしている有用な機能もあるが、安全保障という、その一番大事な根幹は実に情けなく、危うい。主に第３世界で１０年に１度大きな戦争をし、２年に１度小さな紛争を起こすことで、先進国の資本主義経済は回っている。戦争は主義主張というより、経済的理由で起こされているのが現状である。グローバル化した世界では、遠くの戦争だから自分たちの住む世界とは関係がないというわけにはいかない。悲しいことに、そうとは知らずに戦争家に手を貸してしまっていることもある。市場主義原理という落とし穴にはまり込んでいると、常に戦争が起こり、平和は白昼夢に終わる。まずは、事実を知ることである。するべきことが山ほどあるので、何もしないか、或いは山ほどすることがあるのだから、１つでもやろうとするのかで人生は２通りに別れる。どちらの人生を選ぶかは自由だが、選んだ人生により、出会う人が全く異なり、人生の質ともいえるものが違ってくる。世の中を変えることは、マザーの例を引くまでもなく、たった１人から始まる。他の誰かではなく、あなたからだ。力のある人ができることには限りがある。微力だからこそ、多くの人々との連携で成し遂げられることがある。どんなに小さなことからでも淡々と始めると、必ず道は開けてくるものだ。

なお、著者の一人である鬼丸昌也氏は、大学生であった頃に、たった一人でコツコツと地雷除去活動を始め、現在では、広く世界（アフリカを含めた第三世界）で平和活動をするNGO（特定非営利活動法人）テラ・ルネッサンスの代表を務めている。

この２冊の本は、残念ながらまだ図書館には置いていない。興味のある人はネットで検索してみて欲しい。自分で調べ、納得して行動することは何よりも大事であるからだ。夏期休暇中に自分なりの方法で、本に親しむ時間をもつことを切に望みます。